

第31回宇宙環境利用シンポジウムについて

本シンポジウムも通算で31回を数えるに至り、第1回宇宙利用シンポジウムが開催された1984年（昭和59年）から数えますと33年が経ちました。宇宙実験は、構想から実施までに時間がかかりすぎるとお感じになっていることと思いますが、この1984年前後を起点とすると、宇宙環境利用のタイムスケールが実感をもって見えてくることに気づきます。

具体的にお話すると、1984年は正に、米国レーガン大統領が年頭教書にて宇宙ステーション計画（ISS）の推進を発表した年でありました。ISSについては、14年後に最初のロシアのコアモジュール「ザーリャ」が打ち上がり、24年後に「きぼう」の運用が始まりました。2回のシャトル事故が長引かせたとは言うものの、確かに24年は長いと言えます。二つ目は、FMPT計画です。1983年に計画がスタートし、1984年によく実現に向けて120億円の予算が承認されました。9年後の1992年に毛利さんによる「ふわっと'92」実験が実施されました。

昨年、SFU回収20周年のイベントとして、上野の国立科学博物館で、栗木先生、若田宇宙飛行士を中心に記念式典が開催されました。SFU計画は、1983年に宇宙研にSFUワーキンググループが設置され、計画が始動。3年後の1986年に当時の宇宙開発委員会で承認、設計を開始して12年後の1995年に打上げ、約1年間の実験運用が行われました。国立科学博物館には宇宙から帰還したSFUが展示されておりますので、機会があれば是非ご覧になって下さい。

以上、1984年を前後する特筆すべき宇宙環境利用計画についてご紹介しました。そのタイムスケールは、ISSのような超大型の国際プロジェクトは20年、FMPTやSFUのような小型、中型のプロジェクトであれば10年ということになります。現在、40代～50代の盛りの研究者の方であれば、十分取組めるタイムスケールです。翻って今年2017年、これから10年先の本格的な宇宙利用プロジェクトとして、何をターゲットとすれば良いでしょうか。コトを起こさない限り何も始まりません。コトを起せば、10年後には後世に語り継がれるかなりの目玉プロジェクトを実現可能であることを心に刻みたいと思います。

第31回宇宙環境利用シンポジウムは、平成29年1月16～17日の二日間に渡って開催されました。プログラムの内訳は、基調講演（2件）、特別セッション講演“短時間微小重力実験”（講演数7件）、及び“Human Planetary Habitation in Space”（講演数5件、海外講師招聘講演を含む英語講演）、一般セッション講演（セッション数6、講演数23件）であり、延べ参加人数97名のご参加を頂きました。宇宙環境利用専門委員会は、「宇宙惑星居住科学」の大目標の下に、環境利用の対象を地球低軌道の宇宙ステーションから月・火星など惑星環境の利用に拡大、発展するべく一層の活動を進める所存です。引き続き、皆様のご支援、ご指導をお願い申し上げます。